

■伊達千広 歴史家、政治家、歌人。明哲な史論書「大勢三転考」の著者、陸奥宗光の実父で知られる幕末の紀州藩士。だてちひろ

一九膝栗毛始1802＝ 紀州藩士宇佐美祐長の次男に生まれる。本名は宗広。通称は藤二郎。叔父で国政参与御用執事だった伊達盛明の養子となる。

フェートン号事件 1808＝ 6歳：「絵本太閤記」にはまる一方、漢学の手ほどきを受け始めるが、

ゴロブン拿捕 1811＝ 9歳：「源平盛衰記」や「太平記」などを戦記物などむさぼり読んで、人名記憶などはすごかったものの、この年までに、四書を繰り返し4回も読んだが、成績は思わしくなかったという。

浮世床・・・ 1813＝11歳： 養父伊達盛明が死去して、家督を相続。大江公資の娘だった養母によって、大切に育てられ、'日本国に聞こえる'よう学ぶべきと、学師をつけて貰うなどして、

黒住教・・・ 1814＝12歳：この頃には漢学にも心を入れるに至る。

伊能測量終・ 1816＝14歳： 藩主徳川治宝の小姓となる。治宝に才能を愛され、

水野忠成老中 1818＝16歳： 群書類従完結 1819＝17歳： その影響もあってか、監察に任じられた頃には、和歌と国学に心を寄せ、治宝の愛護した本居宣長の養子大平の許で学び、同門になった6つ下の長澤伴雄と親友になる。

・・・ 1820＝18歳： 膝栗毛終・・・ 1822＝20歳： 目付、

シボル来日・ 1823＝21歳： 紀ノ川流域で大規模な百姓一揆が勃発、幕命で治宝は隠居させられるも、子齊順はまだ2歳で、家老山中筑後守を介して実権を発揮するも、幕府が齊順に家老山高石見守をつけ、"山中派"と"山高派"の間の抗争が始まるなか、

シボル事件・ 1828＝26歳：江戸に治宝を迎えに行った時の紀行文「幣帛袋(すさぶくろ)」に教養の深さが示され、

シボル追放・ 1829＝27歳：勘定吟味役、

富籤流行・・・ 1830＝28歳：徒頭格中奥詰、

滑稽+人情本 1835＝33歳：寺社奉行へと昇進、500石取りとなる。

大塩平八郎乱 1837＝35歳： 適塾ハブン・ 1838＝36歳：

天保改革終・ 1844＝42歳：六男のちの陸奥宗光が誕生。熊野三山寄附金貸付方有司総括を命じられ、 藩財政に参与、山中筑後守の懐刀として、非凡なる力を発揮しただけでなく、

阿部正弘首座 1845＝43歳： 孝明天皇・・・ 1846＝44歳： 積年の功劳をもって大番頭格、 多忙な職務の傍ら、

・・・ 1847＝45歳： *のちに内藤湖南によって、「愚管抄」「神皇正統記」に匹敵すると評される、「大勢三転考」を著すも、

・・・ 1848＝46歳： 勘定吟味役兼務にまで異例の昇進、家老山中筑後守を補佐し、"和歌山派"の中心人物として藩政改革を推進する一方、藩内の尊王論を主導するうち、

国定忠治疎・ 1850＝48歳： 長澤伴雄が「詠史歌集」を編する。40余年も寵愛を受け続け、800石取りに至ったため、奢侈の風に思い上がりも生じるなか、 家老山中、名君治宝が相次いで病死すると、幼少の徳川慶福(家茂)を補佐する形で、実権を握った改革反対の"江戸派"の御附家老水野忠央によって、危険思想を広めたとの容疑で捕えられ、家老安藤直裕に預けられて、以後10年近くにわたって紀伊田辺にて幽閉された。

万次郎帰国・ 1852＝50歳： 長澤伴雄が「詠史歌集」を編する。40余年も寵愛を受け続け、800石取りに至ったため、奢侈の風に思い上がりも生じるなか、 家老山中、名君治宝が相次いで病死すると、幼少の徳川慶福(家茂)を補佐する形で、実権を握った改革反対の"江戸派"の御附家老水野忠央によって、危険思想を広めたとの容疑で捕えられ、家老安藤直裕に預けられて、以後10年近くにわたって紀伊田辺にて幽閉された。

ペリー来航・ 1853＝51歳： 治宝の死を悼む書の中で、千広の'超越の昇進に世人は驚いている'と記した長澤伴雄も役を解かれ、千広の一族にも処罰が下された。この間、陸奥宗光が安井息軒のもとで学んでいたほか、家族たちも離散になっていたことは知る由もなかったが、その家族を思う気持ちなどは、没後に刊行された歌集「余身帰(よみがえり)」で知られ、かつて罵っていた仏教の研究・修行に努めて、望郷の情、浮世の念が無くなり、

開国開港・・・ 1854＝52歳： 紀州一帯を襲った大地震にも余裕ある歌を遺している。

松下村塾・・・ 1856＝54歳： 安政の大獄・ 1859＝57歳： 長澤伴雄が獄中で自刃。

桜田門外変・ 1860＝58歳： 遣欧使節・ 1861＝59歳： 8代藩主重倫の三十三回忌の积令で、 釈放され帰宅、養子宗興に家督を譲って{天目庵}に隠居、「大勢三転考」は公表を控えていたが、国事の激動を憂い、

生麦事件・・・ 1862＝60歳： 宗興とともに脱藩して、公武合体運動に参加したため、

薩摩藩士密航 1865＝63歳： 激怒した藩によって和歌山に連れ戻され、再び幽閉の身となった。

大政奉還・・・ 1867＝65歳：すでに心は澄み切っていて、歌友の勧めで、持病の痔疾の治療に赴いた「龍神出湯日記」のなかの僅かな言葉のなかにも、'個の利益でなく公の幸福を求める'経世家としての信念が示されている。

明治維新・・・ 1868＝66歳： *新政府の外国事務局に六男陸奥宗光が登用されるとともに、幽閉が解かれ、宗興も執政に抜擢され、 宗光に従い、大阪に移り住み、敬愛していた藤原家隆ゆかりの地に{自在庵}という庵を建てて隠棲し自得と号するとともに、その地を"夕日岡"(夕陽丘)と命名している。その後も、宗光に、官途にある者の心得を屢々手紙するなどしていたが、

初の日刊新聞 1870＝68歳： 熊野三山参詣に出かけた際の紀行文「三の山踏」、

廃藩置県・・・ 1871＝69歳： 自ら撰じた歌集「夕日岡月次集」、

学問のすすめ 1872＝70歳： 体調を崩し、宗光の勧めにより東京深川の陸奥邸にて悠々自適な晩年をすごすうち、「大勢三転考」が、陸奥邸を訪れた神祇官福羽美静の目に留まり、書を高く評価した福羽に強引に説得され、

明治6年政変 1873＝71歳： 刊行されることになった。あわせて、特異な和歌の理論を提唱し、歌道と禅の要諦とが一致すべきであると説いた「和歌禅話」を出版、のち、佐々木信綱に、近世の歌学史上逸すべからざるものと評される。

佐賀の乱・・・ 1874＝72歳： 三つの反乱・ 1876＝74歳： 「伊達自得翁自筆歌話」「随随筆」、

西南戦争・・・ 1877＝75歳： 没した。

歌集「随縁集」「枯野集」や「余身帰」が遺された。遺言により家隆塚の近くに埋葬され、のちに宗光やその家族もこの地に埋葬された。宗光が千広を顕彰して建立した"夕陽丘肝表"、傍らに"夕日岡(夕陽丘)命名の地"碑、句碑が建てられている。本名は宗広であるが、別名の千広で呼ばれるのが一般的である。